

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K03593

研究課題名（和文）二〇世紀最初期における、欧州統合を用意した世界認識・国際秩序観・世界連邦論の解明

研究課題名（英文）Examinations of the ideas of the world, of international order, and of the world federalism that prepared for European integration in the early twentieth century

研究代表者

川嶋 周一（KAWASHIMA, SHUICHI）

明治大学・政治経済学部・専任教授

研究者番号：00409492

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：ヨーロッパ統合の歴史的成立について、その理念的基礎を再検討すべく、20世紀初頭からローマ条約成立までの思想と統合の展開のインターアクションを、複数の側面から扱った。第一に、オールド自由主義がローマ条約の成立期に果たした役割、第二に、マルクス主義者であると同時にヘーゲル主義者のコジエーヴの統合認識を論稿で明らかにした。それ以外にも、統合に至る国際主義的な思考の生成と展開について検討を行うと同時に、ヨーロッパ統合の歴史的展開やEU政治について、教科書及び一般向け書物に纏めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヨーロッパ統合は21世紀の現在にあって大きな政治経済的実体として欧州に欠かせない存在になっているが、きわめて複雑かつ複層的で、その理解は容易ではない。本研究は、なぜヨーロッパ統合が必要とされたのか、なぜあのような仕組みが整えられたのか、という統合の本元の問題意識に立ち返り、マルチアーカイバルかつ思想と政策を架橋して考察した点で、ヨーロッパ統合およびヨーロッパ国際政治の根幹的理解をアップデートさせた。このようなヨーロッパ理解の深化は直接的間接的にわが国の対ヨーロッパ理解や関係に寄与するものと期待できる。

研究成果の概要（英文）：To reassess the historical establishment of European integration and its ideological foundations, this research examines the interaction of ideas and the development of European integration from the early 20th century to the establishment of the Treaty of Rome from multiple perspectives. Firstly, it addresses the role of Ordoliberalism during the formative period of the Treaty of Rome. Secondly, it elucidates ideas and perspectives on integration held by Alexandre Kojève, a Marxist as well as a Hegelian. In addition, it explores the generation and development of internationalist thought leading to integration. This examination is also encapsulated in textbooks and general publications concerning the historical development of European integration and EU politics.

研究分野：ヨーロッパ国際関係史

キーワード：国際関係史 国際主義 サンドル・コジエーヴ ヨーロッパ統合史 世界認識 連邦主義 機能主義 オールド自由主義 アレク

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

欧州統合史研究は、第二次大戦後に実現する欧州の共同体組織を対象としていた。その前史としての戦間期を対象とする研究も存在していたが、両者とも欧州統合の主として制度的側面に注目した研究という点では共通である。しかし近年の欧州複合危機を受け、より広い文脈における統合現象に目を向けた研究も登場している。この研究潮流は、近年の国際関係史研究の傾向の変化に対応している。すなわち、第二次大戦後を主対象とする潮流から、19世紀末から20世紀初頭までの時期を長い20世紀の最初期と捉え、グローバルな視野の下で当該時期において現代国際関係の力学や国際秩序認識がいかに形作られていったのかを再検討する潮流への変化である。これらの新しい国際関係史研究は、20世紀の最初期に「この地球上の世界はどのようになっているか」という世界認識が成立し、これがその後の国際関係認識に大きな影響を与えたことを強調している。

しかし、これらの研究では、欧州統合の位置づけがまだなされていない。そこで、本研究においては、欧州統合史と国際関係史の接合を図り、両者を架橋することで、20世紀最初期に登場する欧州統合の発想の裏側に、どのような世界認識があったのかを国際関係史的手法を用いて明らかにすることを考えた。

これまで応募者が行ってきた20世紀中葉の欧州統合史研究は、欧州統合内の政策立案や国際交渉を一次史料に基づいて実証的に研究するものであった。これに対して本研究は、これまでの応募者の実証研究を発展的に継承し、欧州統合の発想が登場する20世紀最初期において、統合を思想的に支える世界認識や国際秩序認識がどのようなもので、それらが現実の国際状況といかに結びついていたのかに焦点を当てることを計画した。以上が、本研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、欧州統合史研究と国際関係史研究を接合し、20世紀前半における欧州統合認識の形成と変容を、世界認識との関わりから再検討するものである。

当初、本研究の目的は以下の二点にあった。第一に、19世紀末から20世紀前半における欧州知識人における「世界認識」を明らかにするために、ベルギーのポール・オトレとイギリスのアーサー・ソルターの二人の人物に着目し、彼らの国際協調・世界認識を明らかにすることである。オトレは、19世紀末から知識の体系化運動に従事し、第一次大戦後は国際連盟と連携した世界都市(ムンダネウム)建設を計画していた。国際連盟事務次長を務めたソルターは、後の時代に欧州統合のメカニズムを説明する機能主義理論の論者としても有名となった。第二に、第二次大戦後における欧州連邦主義と世界連邦主義の関連を実証的に明らかにすることである。

以上の点を明らかにして、欧州統合の思想的源泉と世界認識を明らかにし、欧州統合と世界連邦の連関を探ることで、欧州統合の緒元の射程を測ることが、本研究が明らかにすることにあった。

しかし、オトレに関する一次史料およびソルターと機能主義に関する議論を精査する中で、取り上げるべきポイントがずし移動していった。ソルターについては、同じ機能主義でも、欧州統合の議論に直接影響を与えたミトラニーに関する議論をより焦点を当てるべきと判断した。また、世界連邦主義の議論についても、世界連邦主義そのものよりも、ヨーロッパと世界全体の地域秩序と国際秩序の連関を考えるために、欧州連邦運動や連邦主義、またヨーロッパ地域秩序と世界秩序の関係性を哲学的に考えたフランスの哲学者で統合の実務にも当たったアレクサンドル・コジェーヴの認識を取り上げた方が良いと判断した。

そして、本研究の要点は、要するに欧州統合を20世紀史の中に位置付けることにあったが、そのためには最終的に1957年に成立するローマ条約を終点として検討することの必要性を、改めて1900年代初頭から戦間期までの動きを精査し直す中で認識した。そこで、当初20世紀初頭から戦間期を経て1940年代までを研究対象年代として想定していたが、本研究課題においては、1950年代後半まで拡張したうえで、ローマ条約に結実する欧州統合を支えた思想についても説明を進めることとした。

3. 研究の方法

本研究においては、思想家や運動団体などの固有のアクターがどのような世界認識、地域/国際秩序認識をしていたのかという点を考察するものであり、その研究方法としては、そのアクターが著した著作や未公刊史料に当たり、その認識を新しく再構成するものである。そのため、本研究では、イギリス、ベルギー、フランスにおける様々なアーカイブに所蔵されている未公刊史料を収集し、それに基づいて研究を進めるアーカイブ・ワークを基本とする。またその際に、出

来るだけ複数のアーカイブに当たる、マルチ・アーカイバル・アプローチを採用する。

オトレについては、ベルギーのモンスにあるムダネウム付属オトレ文書を閲覧・収集した。ミトラニーについては、ロンドンにあるLSE(ロンドン・スクールオブエコノミクス)大学付属文書館に所蔵されているミトラニー文書を閲覧・収集した。コジェーブについては、パリ(近郊)のフランス外務省文書館、国立史料館、国立図書館手稿部門に当たった。フランスにおける連邦主義者や様々な連邦論者についても同様である。

4. 研究成果

研究成果について触れる前に、本研究の遂行におけるコロナ禍の影響について一言及しておきたい。本研究の3年目の年度末に当たる2020年3月から、世界的な新型コロナウイルス感染症の蔓延(パンデミック)が発生した。そのため、本来研究遂行に際し重要な位置づけにあった2020年3月実施予定の海外史料調査は延期になった。さらにパンデミックの深刻化に伴い、海外渡航制限や大学でのリモート授業への移行など、研究環境に多大な制約が生じ、その結果、研究の遂行が2020年度から2022年度までの三年間、ほぼ一切行えない状況が生じた。そのため研究期間の延長を繰り返し、外形的な研究期間はやや長期になったが、実際に研究に従事できた期間は当初申請期間と同様である。

本研究の成果としては、論文(ワーキングペーパー)の形を取ったものと、そうではない、まだ中間段階のものとの二つに分けることが出来る。

論文の形を取ったものではない成果としては、日本人ではまだ利用がほとんど手つかずのポール・オトレの一次史料をアーカイブ・ワークによって多数入手したこと自体である。オトレをテーマとして論文化することは、予想以上に手間取り、まだ具体的な形を取れていないが、本研究計画の研究期間が終了した後も、何らかの形で論稿としてまとめたい。これは、ミトラニーについても同様である。一部論文(ワーキングペーパー)化した連邦主義者について、ミトラニーの機能主義と連邦主義批判、そして40年代から50年代にかけての仏蘭独などの西欧諸国の知識人・欧州統合主義者とのインターアクションを今後も引き続き解明に努める。

論文の形を取った成果は、大きく分けると以下の三点である。

第一に、研究の目的にも記したように、本研究計画の終着点をローマ条約の成立としたが、その成果が、共著『EUにおける経済通貨同盟の問題点と政策的統合の必要性』(文眞堂)に収録されている「戦後西ドイツの欧州経済統合観とオールド自由主義—ローマ条約交渉における政府内議論を手掛りに1953-1956—」である。これは、欧州統合の経済秩序を基礎づける経済秩序思想の一つで、西独の戦後経済復興に大きな影響を与えたオールド自由主義に注目し、当該思想と欧州統合の連関と、特に1950年代の西独において具体的にどう結びつき影響を与えたのかについて考察したものである。オールド自由主義を考察対象とする先行研究は多数あるが、オールド自由主義が具体的に欧州統合の制度設計にどのような影響を与えたのか、具体的な交渉に即して論じた先駆的研究となった。

第二に、2023年度日本国際政治学会の分科会発表用のワーキングペーパーとして「帝国、ヨーロッパ、国家の終わり：アレクサンドル・コジェーブのヨーロッパ観の変遷をめぐるインテリクチュアル・ヒストリー的研究の試み」を執筆した。ここ数年前に公開されたばかりのコジェーブに関する一次史料を用いて執筆されたその内容は、コジェーブがヨーロッパ統合および国際経済の実務交渉に当たった半生全般にわたり、国内外において、先行研究がほぼ存在しない。今後このワーキングペーパーに基づき、複数の論稿を内外に発表する予定である。

第三に、世界連邦と欧州連邦の関わりについては、第二次世界大戦後に結成された欧州連邦主義(UEF)の運動と、UEFに集った連邦主義者のうち、フランスの連邦主義者に多大な影響を与えた人格主義思想を共有する哲学者ジャック・マリタンの連邦論について、ワーキングペーパーとしてまとめた。

また、これ以外にも、ヨーロッパ統合に関するより概括的な論稿として、岩波書店が2021年から刊行し始めたわが国の外国史研究を総ざらいする新しい『岩波講座 世界歴史』において論稿を発表した。当該論稿は、20世紀を扱う第22巻の中で、ヨーロッパ統合史が初めて独立した論稿として収録されたが、その論稿の執筆者として指名を受け、本研究期間中に年度を跨いで執筆をつづけ、2023年に出版されるに至った。さらに、EU政治の教科書として有斐閣から共著『EU政治』を2020年に、欧州統合の共同体として成立しながらもほとんど注目されていない原子力共同体のユーラトムが持った意味について共著『核共有の現実』に収録されている「ユーラトムとヨーロッパの「核」」論文として発表した。これ以外にも、論文(単行本に収録されたもの含む)が11件、学会・研究会発表(コメンテーター含む)が12件ある。これらの研究成果は、本研究計画によって得られた研究支援なくては成り立ち得なかった。この場を借りて、関係者の皆さま、国民の皆さまに厚くお礼申し上げる次第である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 川嶋周一	4. 巻 -
2. 論文標題 地域統合の進展	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『冷戦と脱植民地化 20世紀後半』（岩波講座 世界歴史 第22巻）	6. 最初と最後の頁 133-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋周一	4. 巻 -
2. 論文標題 「ユーラトムとヨーロッパの「核」」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岩間陽子編『核共有の現実：NATOの経験と日本』（信山社）	6. 最初と最後の頁 152-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋周一	4. 巻 -
2. 論文標題 シューマン・プランの発表（1950年） ヨーロッパ統合を生んだ画期的構想	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岩間陽子、君塚直隆、細谷雄一（編）『ヨーロッパ外交史ハンドブック：ウェストファリアからブレグジットまで』（ミネルヴァ書房）	6. 最初と最後の頁 130-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋周一	4. 巻 -
2. 論文標題 メッシーナ会議とE E Cの成立 EUの制度的出発点	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岩間陽子、君塚直隆、細谷雄一（編）『ヨーロッパ外交史ハンドブック：ウェストファリアからブレグジットまで』（ミネルヴァ書房）	6. 最初と最後の頁 142-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋周一	4. 巻 -
2. 論文標題 ドゴール外交 「フランスの偉大さ」を求めた外交的プラグマティズム	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岩間陽子、君塚直隆、細谷雄一（編）『ヨーロッパ外交史ハンドブック：ウェストファリアからブレグジットまで』（ミネルヴァ書房）	6. 最初と最後の頁 150-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋周一	4. 巻 (書籍内論文のため巻号なし)
2. 論文標題 戦後西ドイツの欧州経済統合観とオールド自由主義 ローマ条約交渉における政府内議論を手掛りに1953 - 1956	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 鈴木利大編『EUにおける経済通貨同盟の問題点と政策的統合の必要性』	6. 最初と最後の頁 14 53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋周一	4. 巻 -
2. 論文標題 ルクセンブルクの妥協	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 よく分かるEU政治	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋周一	4. 巻 -
2. 論文標題 第一章 ヨーロッパとは何か	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 EU政治論：国境を越えた統治のゆくえ	6. 最初と最後の頁 14 - 60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋周一	4. 巻 -
2. 論文標題 第5章 EUの機構	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 EU政治論：国境を越えた統治のゆくえ	6. 最初と最後の頁 107-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋周一	4. 巻 -
2. 論文標題 第12章 デモクラシーと正統性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 EU政治論：国境を越えた統治のゆくえ	6. 最初と最後の頁 268-291
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋周一	4. 巻 65
2. 論文標題 書評 黒田友哉『ヨーロッパ統合と脱植民地化、冷戦 第四共和制期フランスを中心に』（吉田書店、2018年）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代史研究	6. 最初と最後の頁 47-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋周一	4. 巻 -
2. 論文標題 ドイツ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 渡邊啓貴、上原良子（編）『フランスと世界』（法律文化社）	6. 最初と最後の頁 69-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋周一	4. 巻 -
2. 論文標題 翻訳 「第六章 反政治、そして歴史の終わり？」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ヤン=ヴェルナー・ミュラー 『試される民主主義（下）』（岩波書店）	6. 最初と最後の頁 144-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川嶋周一	4. 巻 46
2. 論文標題 「M&M（マクロン・メルケル）」時代の欧州：独仏主導のEUを展望する	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 外交	6. 最初と最後の頁 78 - 83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 川嶋周一
2. 発表標題 帝国、ヨーロッパ、国家の終わり：アレクサンドル・コジェーヴのヨーロッパ観の変遷をめぐる、インテレクチュアル・ヒストリー的研究の試み
3. 学会等名 2023年度日本国際政治学会研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 川嶋周一
2. 発表標題 EUのデジタル・ディプロマシーについて
3. 学会等名 パネル・ディスカッション「デジタルツールとソーシャルメディアの影響力：日常の利用から外交への影響の評価」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川嶋周一
2. 発表標題 (ディスカッサント)第1セッション「マクロン時代の<政治> 何が新しく、何が古いのか」 フランス側パネリスト：ジョルジュ・ソニエ(ミッテラン研究所)報告に対して。
3. 学会等名 シンポジウム「マクロン時代の第五共和制 フランス政治社会の60年」、「マクロン時代の第五共和制」シンポジウム企画委員会主催(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川嶋周一
2. 発表標題 (Commentator) Ryuya DAIDOJI, "Inter-organizational Relations and European Institutions: Human Rights Protection in Criminal Cooperation"
3. 学会等名 JAIR Annual Convention, Panel B-7,
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川嶋周一
2. 発表標題 NPT成立過程におけるユーラトムの位置付けについて：その国際交渉とユーラトムの変容 1966-1968
3. 学会等名 日本政治学会研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川嶋周一
2. 発表標題 ローマ条約の成立とは何だったのか：三次元統合と20世紀史の中の欧州統合の位置付けをめぐって
3. 学会等名 世界政治研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

ベルリンの壁崩壊30周年と欧州統合
<http://eumag.jp/behind/d1119/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------